

# 月刊ウィーン

現地オリジナル取材と編集で  
ウィーンを伝える月刊情報紙  
創刊 25 年目  
創刊 1989 年 Nr. 289

## GEKKAN-WIEN 2013年7月号





# 杉本純の原子力の話 II ウィーンと京都 22



国際原子力機関（IAEA）の第六期技術協力諮問委員会第二回会合が五月三日（一四日）にかけて、ウィーンのIAEA本部において開催された。IAEAには技術関連部局として、原子力科学・応用原子力エネルギー、原子力安全・セキュリティ、保障措置、技術協力の五局がある。各局が外部委員より構成される諮問委員会を設けて、各局の活動を検討し結果を事務局長へ提言している。技術協力局の役割は、加盟国の持続的な社会・経済的発展を支援するに当たり、原子力技術の安全、平和かつセキュリテを確保した利用を強化、維持する技術サービスを提供することである。具体的には、教育・訓練等を通じた人材育成、ネットワーク化、知識の共有、研究開発支援、技術的助言、関連資機材の提供などが主な活動内容であり、他の四局の活動に横断的に関連している。

筆者は、昨年に引き続きこの委員会に出席した。主な議題は、加盟国の放射線安全基盤に対する技術協力局の支援強化、持続的エネルギーへのIAEAの貢献、技術協力局の関与による経済へのインパクトの評価である。会合冒頭で事務局長から挨拶があり、技術協力は原子力安全と並びIAEA予算では優先度が高く、外部からの新鮮なアイデアと具体的な



技術協力諮問委員会の様子

提言を期待している旨述べられた。その後、コロンビアのイエベス議長により議事が進められ提言をまとめた。我が国は米国に次ぐ多額をIAEAに拠出しており、予算の効果的活用、説明責任の観点から国益を見据えた戦略的な対応が重要と考え、原子力新参入国を中心とした原子力人材育成の重要性などを訴え、提言に取り入れられた。

さて、今月のウィーンと京都の対比では、両市の美術館について述べてみたい。ウィーンは芸術の都と呼ばれるだけあって、美術史博物館を始め、ベルヴェデーレ宮殿、アルベルティーナ、レオポルド美術館、造形美術アカデミー絵画館、分離派会館など著名な美術館に恵まれている。例えば、美術史博物館は四百年間にわたるハプスブルク家の美術コレクションを中心に古代から十九世紀に至る欧州各地の美術品を収蔵している。ルーベンス、ペラスケス、デューラー、ブリューゲル、フェルメール、ラファエロなど巨匠の作品が並ぶ。また、ベルヴェデーレ宮殿にはクリムトやシッレの名作が揃っている。ルーブル美術館など錚錚たる美術館を擁するパリに引けを取らない。

一方、京都の美術館は、京都国立博物館、京都市美術館、京都市立近代美術館など公立美術館、京都大学総合博物館、京都市立芸術大学芸術資料館など大学関係美術館、京セラ美術館

野村美術館など私設美術館に大別される。このうち京都市美術館は、平安時代から文化・芸術の中心地としての伝統と活発な制作環境を背景に、昭和三年に京都で舉行された昭和天皇即位の大典を契機に、東京美術館に次ぐ我が国一番目の大規模公立美術館として昭和八年に設立された。今年で八十周年を迎える。富岡鉄斎、竹内栖鳳らの日本画を中心に豊富な所蔵品を誇る。ルーブルのミロのヴィナスが海外へ渡ったのは、一九六四年の東京国立西洋美術館と京都市美術館の一度だけであるように、特別展示でも市民に親しまれ、観光にも貢献している。

余談であるが、筆者はウィーン赴任中、美術史博物館、ベルヴェデーレ宮殿などの美術館を良く訪問した。京都市美術館には学生時代はもとより、再び京都に住むようになった現在も、最近のゴッホ展を家内と観るなど度々足を向けており、訪れて、日本画の美術館なども良く訪れた。両市の美術館を満喫できた幸運に感謝しつつ、ベルヴェデーレ宮殿を描いたスケッチを掲載させていたたく。

■ 杉本純 京都大学教授／元原子力機構ウィーン事務所長 ■

ベルヴェデーレ宮殿

